都井岬のウマとその保護について

京都大學人文科學研究所

今　西　錦　司

目　次

都井岬のウマとその保護について

京都大學人文科學研究所
今　西　錦　司

Ⅰ 棲　息　地

都井岬は、宮崎縣南那珂郡都井村に屬し、宮崎縣の最南端から、さらに東南に太平洋に突き出した岬である。この岬の大半472ヘクタールが、都井村の牧組合の所有地である。以前は、岬全体が芝地であつたらしいが、現在では、岬の主稜をなす2つのピークのみが芝地として残され、あとは雑木林と、杉の植林になつている。岬は、全般として、低山帯の景観を呈している。この山林や芝地に、約70頭の御崎馬が棲息している。岬の東南部には、蘇鐵の自生林があり、天然記念物に指定されている。

Ⅱ 御　崎　馬

この岬は、古くは秋月藩の御領牧場であり、當時放飼された馬が、自然蕃殖の狀態で現在まで存續しているのである。この馬は、一般に御崎馬又は串間馬、福島馬とも呼ばれている。明治の頃、一時種馬として改良洋種を入れたことがあるが、御崎馬の血統に他種が入つたのは、これが1回であり、また短かい期間であつたらしい。現在では、たとえば、額部の流星とか、繋部の白といつた洋種の遺傳的形質は、すでにほとんど消滅しており、栗毛、鹿毛、黑鹿毛などの、長いたてがみと、横巾のひろい、背のひくいニホンウマの特徴を、どの個体にも認めることができるのである。形態的な細かい研究は、すでに宮崎大學農學部の三村敎授の研究室でなされているから、その方の文献を參照されたい。ただここでいわんとすることは、少くとも、御崎馬が、きわめて純粹に近いニホンウマであるということである。すでにニホンウマが淘汰され盡した現在では、御崎馬は、いまなお殘存しているニホンウマの唯一の集團であるということができる。

Ⅲ 御崎馬は如何に管理されているか

御崎馬は、現在都井村の牧組合により所有され、管理されている。岬の根本が木柵で仕切られており、これから先を牧というが、この中を組合員が、交代で見廻り、斃死馬の確認をしたり、水場の手入れをしたり、産仔數をしらべたりなどしている。年に1回、晩秋から冬にかけて、牧の人たちは、總出で當才のオスの仔馬を生捕る。生捕られた仔馬は、ある期間舍飼いにされて、家畜としての取扱いに慣らし、市場に出されるのである。これが牧組合の收入である。御崎馬は粗食に耐え、蹄は堅牢で、持久力があり、20年以上の勞役に耐えうるという定評があり、近郷では喜ばれているようである。種馬として牧に殘される少數の個体を除いて、オスはみなこのよ

うな運命を辿るが、メスのすべてと種馬は、岬で生まれ、この山野で一生をすごすのである。しかし、彼等の生活は、われわれが常識的に考える牧場での生活というようなものとは、まるで異つたものである。管理というのは、組合の營利的目的に基いた以上のような簡單なものにすぎない。そして、ほとんどのウマは、岬の山林の中や、芝の斜面で、一生人手にかかることのない彼等自身の生活を營んでいるのである。彼等は、三三伍伍、彼等の好いた同志の仲間で群れを作つて、好きな場所を領有し、いくつかのこうした群れが、お互いに社會的な交渉を保ちながら生活を營んでいる。交配も、彼等の中で自由に行われるし、分娩も山の中で行われ、何等人手を借りることがない。ただひとつの、そして最も大きな人間の影響は、組合のオスの仔馬を生捕るという慣行のために、メス、オスの比が、著るしく不均衡になつており、したがつて御崎馬の社會はこの方向に歪んでいるという事實である。

IV　われわれの研究と、現在の管理に對する批判

われわれの研究の目的は、このような半野生狀態で生活している御崎馬の社會構造をしらべることであつた。1948年より、1951年までに、5回の調査をおこない、第1、第3、第4報はすでに刊行された。（第2報は出版社の都合で遅れているが近日中に出版の運びとなるであろう。）詳しくはこれらの報告を參照されたい。調査の内容は、岬に棲息する1頭1頭のウマをマークし、彼等の間にみられるいろいろな社會關係を求め、さらにこれを地縁的な關係によつて、ひとつの構造としてとらえる。個体は完全にマークされているから、つぎの調査では、個体の行動の變遷とともに、社會構造の變化を追跡することができる。このようにして、御崎馬の社會構造が明らかにされていつたのである。そしてこのような研究は今まで全然試みられたことがなかつたから、比較社會學の上に、新らしい重要な資料を提供することができたのである。またその結果のひとつとして、近年の御崎馬の蕃殖の不振は、組合の古くからの慣行であるオスの仔馬をほとんど生捕つてしまうことに、原因しているということも判明した。だから、1950年5月には、組合の協力を得て、一度生捕られ、種馬として訓練され、飼養されていた4才のオスを、1時的に牧に放し、牧の半野生馬との間の社會關係の實驗的な研究を行うとともに、翌春の産仔數の例年との相違を見たところ、明らかなる増加の傾向を認めることができたのである。メスの頭數に適當したオスの頭數というものはまだ求められていないが、現在のように、わずか3頭のオスしかいないという狀態では、決して滿足でないことは明らかである。組合は、1頭でも多く生ませ、1頭でも多く賣却することに汲々としているが、科學的に導き出された事實に基いた適切な管理の必要性が考えられるのである。生產的、營利的對象として、御崎馬を考えるまえに、まず御崎馬の社會を保護しなければならない。いま蕃殖に關する問題を一例として擧げたわけであるが、そのほかにも、いくつもの問題がある。近年の杉の植林は、御崎馬の食物を奪い、棲息地としての土地價を極度に低減してしまつた。また、芝地に、飼料としてネムノキを植えるといつた畜產的なプランは、せつかく安定した芝地を、ブッシュに化してしまうおそれがないではない。動物を保護する場合、その棲息地も、適當に保護されなければならないことは當然のことである。種馬を、

柵を設けてその中に保護するというプランも、自由なまとまりと、秩序をもつて生活している彼等の社會を考えるとき、やたらに、社會生活の混亂を導くにすぎないかもしれない。われわれは何よりもさきに、この貴重な半野生馬の集團に對し、國家的な保護を與えることの必要を感ずる。そして、そのためにはまず、天然記念物に指定されるのが、もつとも適當な處置ではないかと考えるものである。

V　御崎馬の價値

以上、御崎馬の簡單な說明と、われわれの研究によつて明らかになつた御崎馬の現狀について概略の說明を試みた。ここに、御崎馬の價値として、科學的資料としての面とともに、社會的な面をもあわせ考えてみたい。

(1)　御崎馬の科學的資料としての價値

すでに述べたように、御崎馬は、ニホンウマの唯一の殘存集團である。同じ都井岬の、蘇鐵とか、近くの青島のビローなどは生物地理學的な意味で天然記念物の指定をうけているけれども、これより南に行けば至るところに見出しうるものである。これに反して、御崎馬は、ニホンウマの殘存している唯一の集團であり、世界にただひとつの存在である。家畜の系統史は、人類文化史を解明するひとつの有力な手がかりとされているのであるが、御崎馬は、今後こういつた方面からも、大いに研究されねばならない貴重な資料である。なお御崎馬それ自身の價値のほかに、彼等の棲息地とその棲息狀態が有する價値をも忘れてはならない。日本には、大動物で御崎馬のように、自然の狀態で社會生活を行いながら、しかもこのように接近の容易なものは、ほかにはほとんど見出すことができないのである。したがつて、御崎馬は、これからさきも、生態學、社會學、心理學等の研究者にとつては他に得がたき貴重な研究對象であり、その棲息地は、永久に保存さるべき自然の實驗室であるといい得るのである。

(2)　御崎馬の社會教育的な價値

かの有名な、アフリカのケニアにある自然動物園のように大規模なものは、わが國ではとても望むべくも得られないが、御崎馬のような存在こそは、その自然とともに、せめてその目的の一端に供せられてよいと考えるものである。現代の歐米における動物園とか、水族館というものが、何故に自然を模倣しようとし、出來るだけ廣大な面積を利用して、野生の狀況を再現せしめようとしているのか？　こういつた結構な動物園や水族館を持たない日本の子供たちにとつて、（あえて子供だけとはいわない）御崎馬のような對象がそのまま重要な教育資源であり、文化財となりうることは疑を待たない。御崎馬はけつして家畜ではない。したがつて、當局の適當な保護が得られれば、歐米の動物園よりも、遙かに貴重な存在となるであろう。都井岬は、太平洋を背景とした、日本には珍らしい雄大な景觀をもつたところである。現在、都井岬は觀光地として、多くの人々が訪れるようになつているが、御崎馬は、ただ單に觀光のための呼びものであつてはならない。多くの子供たちが、御崎馬によつて、動物の自由な自然な生活を觀察するとともに、〝如何に自然を見るか〟を學ぶべきであろう。御崎馬は、このよ

うに、多くの人々によつて生かされてゆかねばならない。われわれが研究している最中にも、よく1團の生徒たちが岬にやつて來た。しかし、彼等が、芝地で遊んでいる馬を見つけると、直ぐに石を握り、つぎの瞬間には、馬めがけて投げつけているといつた狀景にしばしば相遇した。われわれはまず國家が、この重要な敎育資源の意義を明らかにするために、すすんでその管理の任に當る必要のあることを痛感するものである。

(3) 御崎馬の實用的な價値

かつて軍國主義の華やかなりしころ、軍部は外國種を輸入してニホンウマの馬格改良に狂奔した。しかし、都井岬は、さいわい僻遠の地であつたから、ここのウマだけは、かろうじてその被害をまぬかれ、ニホンウマの原形を保有することができたのである。われわれは國粹主義の立場から、日本在來馬を讃美するものではない。ただニホンウマは日本の在來農業に適合した、すこぶる重寶な家畜であつた、ということを强調したいのである。トラック道路が至るところに普及するようになつた現在でも、一歩わきえ入れば、荷車もとおらぬ山道があつたり、そのさきに耕地整理のほどこされてない、不規則な形の田畠が見いだされたりするというのが、われわれの知つている多くの村の姿である。こういうところでは山道に强い、脚の達者な、小廻りのきく、小型馬を使うことが、農耕用にも駄載用にも便利である。お隣りの中華民國では乘馬にはウマ、挽馬にはラバ、駄馬にはロバと、3通りの家畜の使いわけをしているが、わが國では小柄なニホンウマ1種を使つて、用をたしていたのである。だから、日本農業にして變らぬかぎり、ニホンウマはいまでも重寶なはずであり、したがつて御崎馬の市價が、普通のウマより高い理由のひとつも、ここにあるのである。われわれはもはや、舊軍部のように、農村の都合を無視してまで、日本のウマを劃一化しようという愚策をさけ、用途に應じて、大きいウマも小さいウマも生產できるようにしなければならない。この点からいえば、御崎馬はわが國に多い山間部の農村の要求する、小型馬の貴重な供給源としてもつともつと重要視されてよいのである。われわれの研究もそれゆえ、單なる學術的研究にとどまることなく、つねにその基礎の上にたちながら、御崎馬の增產ということに對しても注意をおこたらなかつた次第である。